

都市型市民マラソンにおけるスポーツ消費者行動：奈良マラソン2019 の参加にあたりランナーが感じた制約とその解消行動

備前 嘉文¹, 二宮 浩彰², 胡 威³, 徐 嘉楓⁴

Sports Consumer Behavior in an Urban Marathon: Constraints Negotiation Process in Nara Marathon 2019 Runners

Yoshifumi Bizen¹, Hiroaki Ninomiya², Wei Hu³, Jiafeng Xu⁴

In recent years, competitions among events have become more intense as many marathon races are held throughout the country. It is indispensable to acquire stable participants in order to hold a marathon event continuously. We conducted a questionnaire survey for runners participating in the Nara Marathon 2019, and aimed to clarify the consumption behavior of runners participating in urban marathons. Specifically, we clarified the personal attributes of the runners, consumer behavior associated with participating in marathon events such as running activities and tourism activities, evaluation of Nara marathon, and intention to re-participation. We also asked the runners about constraints when they felt in considering participation in the marathon event, negotiations on what kind of efforts they usually take to participate in the marathon event. We conducted a web survey of runners who participated for about 10 days after the end of the Nara Marathon 2019, and received 2,591 answers. Regarding the analysis method, simple tabulations or cross tabulations based on personal attributes were performed for each item. As a result of this study, about 30% of the respondents participated in the marathon event with accommodation. It was also revealed that many runners are regularly engaged in time management, financial management, and skill acquisition. In particular, runners who participate in marathon events with accommodation have always been conscious of negotiation activities because they are forced to more constraints.

[Key words] sport event, running participation, constraints, negotiation, marathon

近年、全国各地でマラソン大会が開催されることにより大会同士での競争も激しさを増している。継続的にマラソン大会を開催するにあたっては安定的に参加者を獲得することは必要不可欠である。そこで、本研究は、奈良マラソン2019参加ランナーを対象にアンケート調査を実施し、都市型市民マラソンに参加するランナーの消費行動を明らかにすることを目的とした。具体的には、参加ランナーの個人属性やランニング実施状況、大会参加状況、宿泊、大会運営に対する評価、奈良マラソンの評価と再参加意図などを明らかにするとともに、ランナーが大会への参加を検討するにあたり感じた制約やその制約を解消するためにどのような行動を取っているかについての質問を行った。奈良マラソン2019終了後から約10日間、参加ランナーを対象にウェブ調査を行い、有効回答は2,591票となった。分析方法については、項目ごとに単純集計または性別および年代によるクロス集計を行った。本研究の結果として、回答者の約3割が宿泊を伴って参加していることが明らかとなった。また、多くのランナーがマラソン大会に参加するために日頃から時間のマネジメントや金銭的マネジメント、スキルの獲得といった取り組みを行っていることが明らかとなった。

[キーワード] スポーツイベント、ランニング実施、制約、交渉、マラソン

1 國學院大學人間開発学部 (Faculty of Human Development, Kokugakuin University)

2 同志社大学スポーツ健康科学部 (Faculty of Health and Sports Science, Doshisha University)

3 同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科博士後期課程 (Graduate School of Health and Sports Science, Doshisha University)

4 同志社大学スポーツマネジメント研究センター (Sports Management Research Center, Doshisha University)

I. 緒言

奈良マラソンは、奈良県奈良市と天理市で開催される大規模な市民参加型マラソン大会である。2010年に「平城遷都1300年記念行事」の一環として、平城宮跡を舞台とした第1回大会が開催された。奈良県、奈良市、天理市、(一財)奈良陸上競技協会などから構成された奈良マラソン実行委員会が主催している。「奈良マラソン2019」は10回目の大会となり、平城宮跡をはじめ、奈良が世界に誇る数々のロケーションをコースに採り入れ、マラソンを通してスポーツの振興を図るとともに、奈良の魅力を存分に伝える大会となっている(奈良マラソン2019実行委員会, 2019)。奈良マラソン2019は2019年12月7日(土)・8日(日)の二日間にわたって、ならでんフィールド(奈良市鴻ノ池陸上競技場)で開催された。7日に3kmジョギング、8日に10kmレースとフルマラソンが行われ、ならでんフィールド(同市鴻ノ池陸上競技場)を発着点として、天理市との間を往復するフルマラソンに11,977人、奈良市内を巡る10kmレースには3,971人が出走した(毎日新聞, 2019)。ランナー以外にも、ボランティア、競技役員、救護スタッフ、行政職員、ガードマン等6,800人以上が大会の運営にあたり、沿道からも約22,000人の観衆が声援を送った。また、奈良マラソン2019開催期間中には、バルセロナ五輪で銀メダル、アトランタ五輪で銅メダルを獲得した有森裕子氏によるランニングクリニックや競技場内の特設会場では「奈良マラソン2019EXPO」も開催され、奈良の特産食材や郷土料理、伝統工芸品や地場産品など、奈良の良さ、魅力をPRする物販や飲食物が提供されるなど競技以外の面でも多くの人で賑わった。このように、マラソン大会を開催することにより、開催地域に対しての経済的な効果や地域活性化に繋がることが期待されることから、多くの自治体でマラソン大会が開催されるようになっている(二宮ほか, 2014)。

ランニング活動は、誰もが気軽に行えるスポーツ活動であり、プロや実業団に所属する一部のアスリートランナーを除き、大多数のランナーにとってマラソン大会に参加することは、日常生活における自由な時間に行われるレジャー活動にあたる。よって、参加の希望はあるものの、時間や金銭面など何等かの要因により参加を断念せざるを得ない状況が生じる場合もある。このような、レジャー活動に関する研究において人が活動への参加を検討するにあたり、その行動を妨げる要因を「制約」(constraints)と呼ぶ(Crawford and Godbey, 1987)。レジャー活動への参加を検討するにあたり生じる制約に関しては、参加者個人の心理

的状况や、「休暇の取得」や「仕事や家事・勉強の責任」といった置かれた立場や生活状況に起因する「個人内の制約」(intrapersonal constraints)、活動を行うにあたり関わる他人との関係に由来する「対人的制約」(interpersonal constraints)、「会場までのアクセス」や「イベント開催地の地理的な場所」といったイベントを取り巻く環境や状況に基づいた「構造的制約」(structural constraints)の3つが挙げられている(備前ほか, 2016)。例えば、マラソン大会への参加は他のレジャー活動に比べて活動強度が高く、誰もが簡単に参加できる活動ではない。そのため、完走をめざすにあたっては、日頃から自主的に練習を重ねることによりランニングスキルを向上させることが必要となる。しかしながら、近年、働き方改革が注目されているように、日本社会においては日頃からの長時間労働や、年間の有給休暇の取得率の低さから、多くのランナーはマラソン大会参加に向けた練習を行うにあたって「仕事の調整」や「家族や同僚の理解」といった解消しなければならぬ制約に直面していると考えられる。また、奈良マラソン2019でもフルマラソンの部は10,000円の参加料が設定されているように、多くのマラソン大会ではランナーは「参加費」を支払って大会に出場する。その他にも、遠方から宿泊を伴って参加するランナーにとっては、大会が開催される場所までの「交通費」や「宿泊費」が必要となることから金銭面の制約も検討しなければならない。その他にも、多くのマラソン大会においては、関門と制限時間が設けられていることや、コース設定によって難易度が大きく異なることから、大会の難易度も参加者が考慮する事柄として挙げられる。このように、マラソン大会への参加を検討するにあたってランナーは様々な制約に直面するのである。

そして、制約を解消する取り組み(交渉行動: negotiation)に関しては、日頃から節約をするやマラソン大会に参加するためにお金を用立てるなどの「金銭的マネジメント」、計画的に行動するやマラソン大会に参加するために日程の調整をするといった「時間のマネジメント」、一緒にマラソン大会に参加する人や同じ趣味を持った人を探す努力をするなどの「対人的調和」、そしてマラソン大会に参加するために必要な能力の向上に努めるといった「スキルの獲得」の4つがあるとされている(Jun and Kyle, 2011)。このように、ランナーはマラソン大会への参加を検討する場面において制約を感じた際、図1に示すような、制約を解消しようとする取り組みを通じて実際の大会への参加が可能となる。

近年、全国各地で市民マラソン大会が開催されることにより大会同士での競争も激しさを増している。中

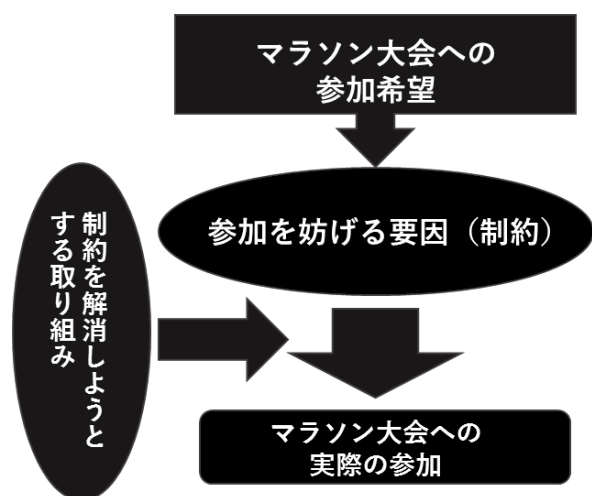


図1 マラソン大会への参加を検討する際の行動

には、出場者の減少などを理由に廃止になる大会も出てきたと報告されている（読売新聞，2019）。市民マラソン大会の飽和状態が懸念される中で、継続的に市民マラソン大会を開催するにあたっては安定的な参加者の獲得が必要不可欠となる。奈良マラソンにおいても、2010年に開催された第1回大会からこれまでは順調に参加希望者数を増加させてきたが、今後もその人気を維持していくためには参加者ランナーの属性や大会に対する満足度や要望といったニーズ、ランナーが大会への参加を検討するにあたりどのような制約に直面し、日頃からどのような取り組みを行っているかを把握することは重要である。そこで本研究では、奈良マラソン 2019 参加ランナーを対象として、個人属性やランニング実施状況、大会参加状況、大会に対する評価、宿泊の有無などを明らかにするとともに、ランナーが大会への参加を検討するにあたり感じた制約やその制約を解消するためにどのような行動を取っているかについて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査項目の設定

本調査では、個人属性、ランニング実施状況、大会参加状況、宿泊、奈良マラソンについての満足度と要望、奈良マラソンの評価と再参加意図、奈良マラソンへの参加を検討するにあたり感じた制約と日頃の取り組みといったスポーツ消費者行動や大会運営に関する調査項目を設定した。

1) 個人属性

個人属性は、性別、年代、職業、世帯年収、最終学歴、居住地の郵便番号といったランナーのプロフィールに関する項目である。

2) ランニング実施状況

ランニング実施状況は、1年間のランニング大会出場回数、ランニング歴、月間走行頻度、月間走行距離、フルマラソン完走回数、フルマラソンの完走タイムといったランニングへの取り組みに関する項目である。

3) 大会参加状況

大会参加状況は、エントリー種目、下車した駅、利用した路線、駅からの交通手段、会場到着時刻といった大会参加に伴うランナーの会場までのアクセスに関する項目である。

4) 宿泊

宿泊は、宿泊の有無、宿泊の場所、宿泊数といった奈良県内外における宿泊に関する項目である。

5) 奈良マラソンの大会運営について

奈良マラソンの大会運営については、奈良マラソンの満足度、給水・給食所で良かった提供物、奈良マラソンのコースの混雑状況に関する項目である。

6) 奈良マラソンの評価と再参加意図

奈良マラソンの評価と再参加意図は、奈良マラソンに対する総合的な評価、参加する前の期待と比べた評価、再参加意図といった大会への評価および今後の参加意図に関する項目である。

7) 奈良マラソンへの参加を検討するにあたり感じた制約と日頃の取り組み

奈良マラソンへの参加を検討するにあたり感じた制約と日頃の取り組みは、個人内の制約、対人的制約、構造的制約および金銭・時間に関する取り組み、その他の取り組みに関する項目である。制約に関しては、奈良マラソン 2019 への参加を検討するにあたり「1. まったくあてはまらない～5. とてもあてはまる」、日頃の取り組みに関しては、「1. まったく行っていない～5. 常に行っている」の5段階で回答を求めた。

2. データの収集

1) 調査期間：2019年12月8日から12月17日までの10日間である。

2) 調査方法：奈良マラソン 2019 実行委員会から、ランナーに調査票 URL リンクが記載されたメールを送信し、ランナーがウェブ調査に回答することで、調査が実施された。

3) 調査対象：RUNNET（インターネット申し込み）にてエントリーしたランナー（15,448人）を調査対象として調査が行われ、3,181票の回答を得た。

3. 分析方法

収集したデータのクリーニング（外れ値および回答を中断している回答の削除）を行ったところ、有効回答は2,591票となった。分析方法については、項目ご

とに単純集計または性別および年代によるクロス集計を行い、図を用いて結果を示した。7) 奈良マラソンへの参加を検討するにあたり感じた制約と日頃の取り組みに関しては、項目ごとに全体の平均値を出すとともに、t検定を用いて男女または宿泊の有無の2グループ間で平均値の比較も行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. 個人属性

図2～6には、回答者における内訳を示している。性別に関しては、男性が1,954名(75.4%)、女性が637名(24.6%)であった。奈良マラソン2019の

フルマラソンの出走データでは、フルマラソンには11,977名が参加し男性が9,714名(81.1%)、女性が2,263名(18.9%)であったことから、本調査のサンプルとほぼ同じ割合となっている。年代については、40代が37.7%と最も多く、次いで50代の32.1%、30代は15.1%であった。職業は、会社員が1,649名(63.6%)と最も多く、次いで公務員、パート・アルバイトの順番という結果になった。世帯所得については、1,000万円～1,500万円と回答した人が275名(10.6%)と最も多く、奈良マラソン2018の調査と同様の結果となった(徐ほか, 2019)。最後に、最終学歴については、大学・大学院卒業または在学中と回答したランナーが全体の6割以上を占めた。

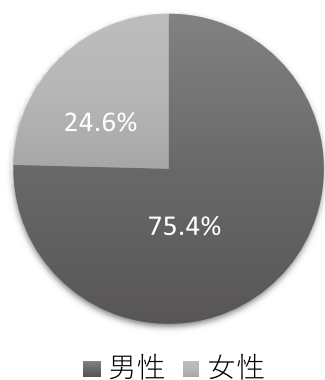


図2 性別

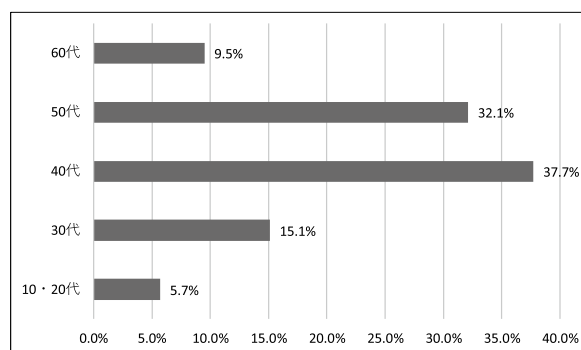


図3 年代

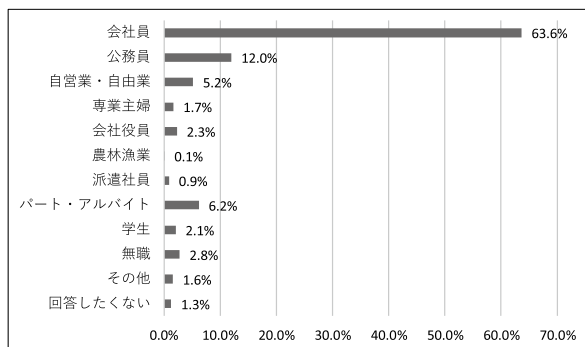


図4 職業

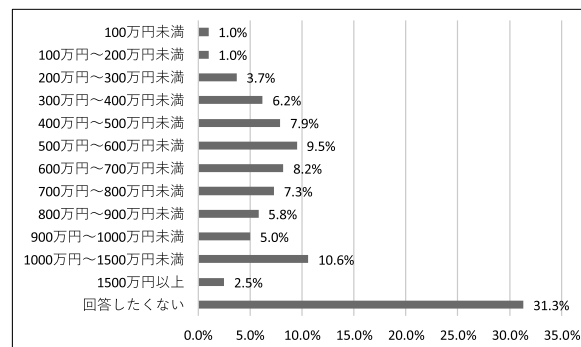


図5 世帯所得

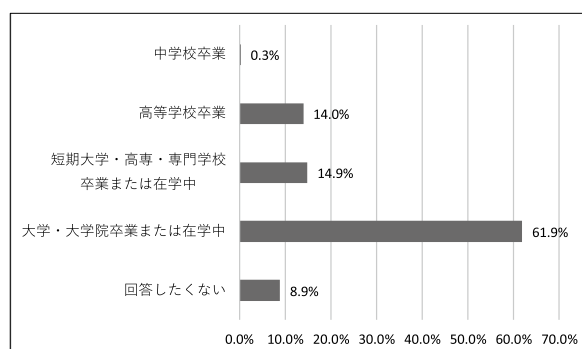


図6 最終学歴

2. ランニング実施状況

過去1年間に3km以上のランニング大会に出場した回数を聞いたところ、2~4回が1,122名(43.3%)と最も多く全体の4割以上を占める結果となった。また、ランニング歴については平均8年、月間走行頻度は平均10.8回、月間走行距離は108.6kmという結果となった。図7~10には、男女の年代別のランニング実施状況を示している。男女ともに年齢を重ねるごとに月間走行頻度、月間走行距離が高くなっていることがわかる。奈

良マラソン2019の記録を含むフルマラソン完走タイム<自己ベストネットタイム>に関しては、全体で4時間48分であった(図11)。アールビーズスポーツ財団が全国のランニング実践者を対象に実施した2018年度ランナー世論調査でも、月間走行距離の平均が124.1km、過去3年以内のフルマラソン自己ベストタイムが男性平均4時間5分57秒、女性平均4時間35分34秒であったことから、今回の調査参加者の回答と近い値となっている(一般財団法人アールビーズスポーツ財団, 2018)。

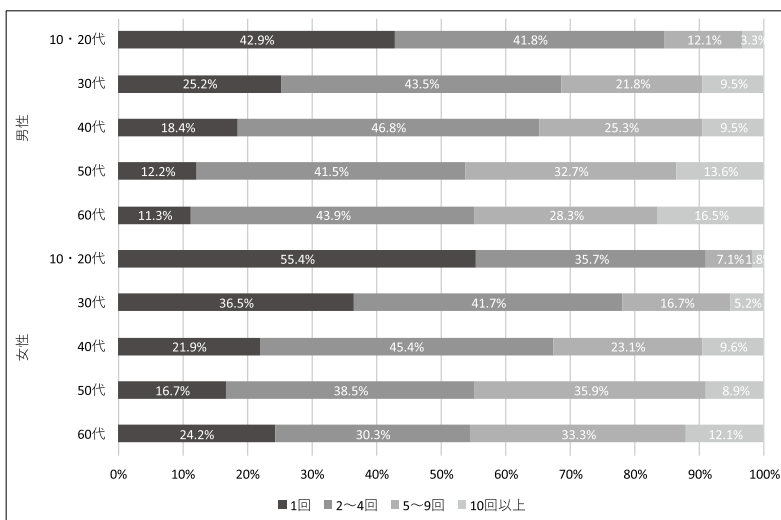


図7 1年間のマラソン大会出場回数

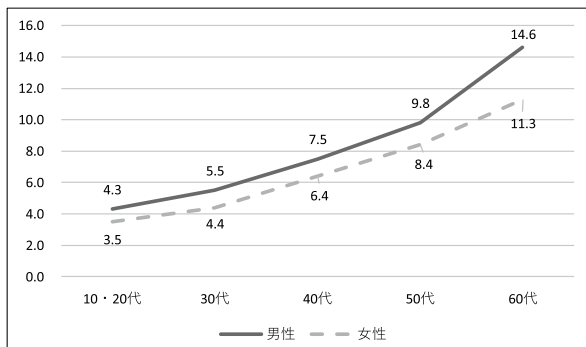


図8 ランニング歴の平均値(年数)

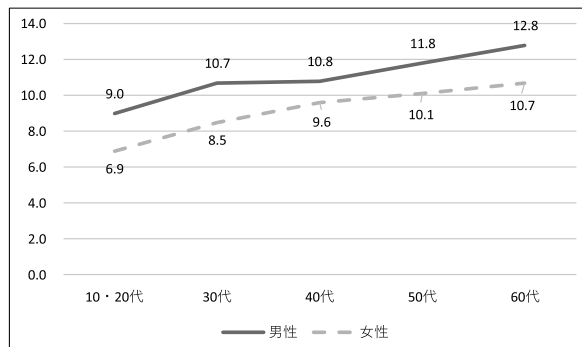


図9 月間走行頻度の平均値(回数)

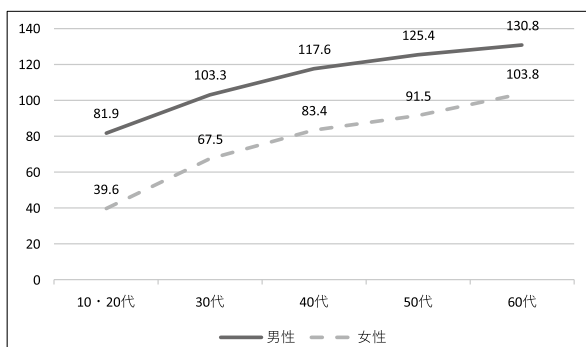


図10 月間走行距離の平均値(km)

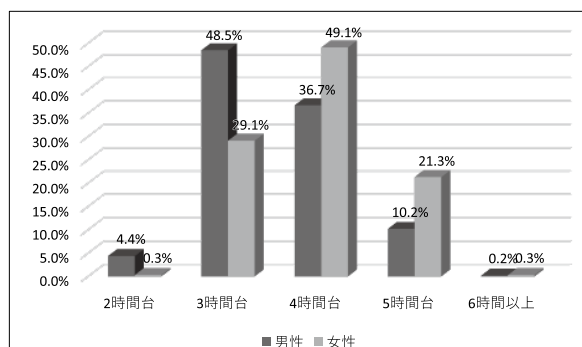


図11 フルマラソン完走タイム<自己ベストネットタイム>

3. 大会参加状況

奈良マラソン 2019 のエントリー種目では、フルマラソンの参加者が 2,055 名 (79.3%) と最も多かった。次いで、10km の参加者が 477 名 (18.4%) となった。会場までのアクセスに関しては、マラソン大会第 1 日目 (12 月 7 日) の来場時に下車した駅を聞いたところ、近鉄奈良駅が 1,103 名と最も多かったが、電車を利用しなかったも 760 名と近隣から多くのランナーが参加していることがわかる (図 12)。また、マラソン大会第 2 日目 (12 月 8 日) の来場時に利用した路線および下車した駅については、近鉄奈良線→近鉄奈良駅の 724 名と最も多く、駅から会場までのアクセスについては、徒歩 (1,371 名)、バス (614 名)、タクシー (16 名) の順であった (図 13 ~ 14)。

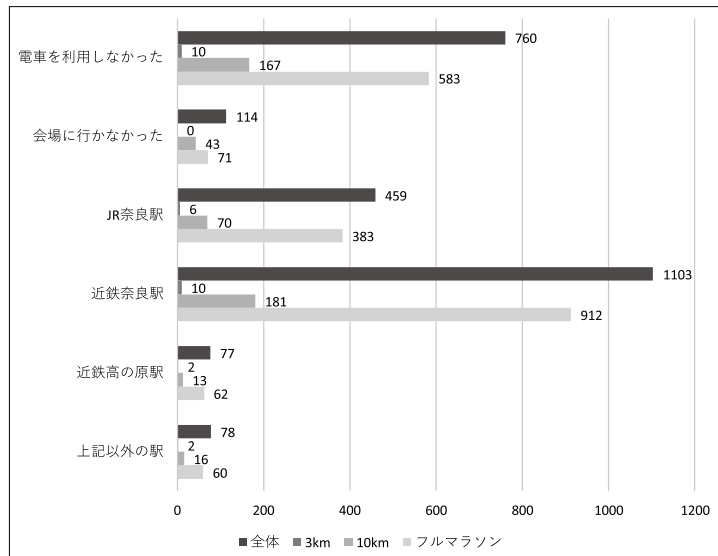


図 12 奈良マラソン第 1 日目の来場時に下車した駅

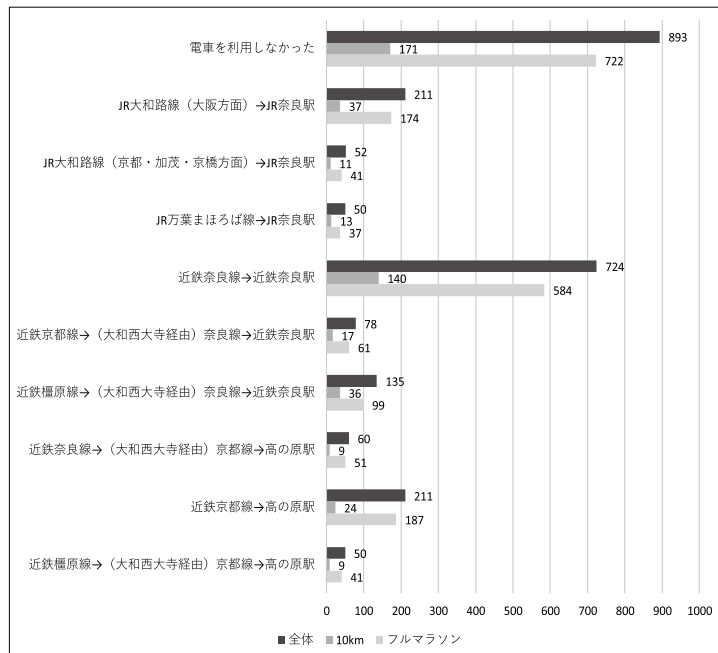


図 13 奈良マラソン第 2 日目の来場時に利用した路線および下車した駅

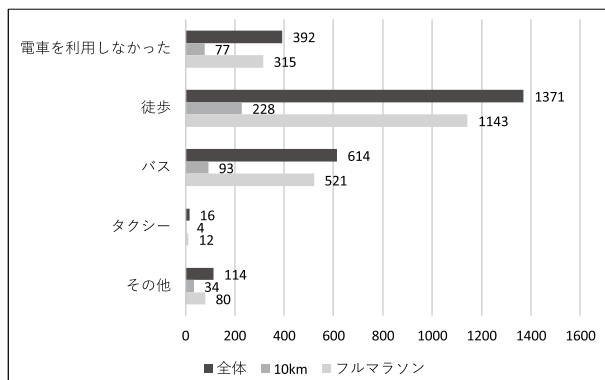


図 14 奈良マラソン第 2 日目の駅からの交通手段

4. 宿泊

奈良マラソン 2019 に参加するための宿泊の有無について聞いたところ、自宅から日帰りの参加と回答したランナーが 1,837 名 (70.9%) と最も多かった。宿泊を伴って参加したランナーのうち、居住地の郵便番号が得られた 697 名についてさらに詳しくみたところ、500 名 (71.7%) が近畿地方以外の都道府県からの参加者であった。兵庫県から参加の 86 名と大阪府からの参加の 61 名も宿泊を伴って参加していたが、近隣の都道府県から参加したランナーの大半は日帰りでの参加であった。一方で、奈良県内の宿泊施設に宿泊が 548 名 (21.2%)、友人・知人宅に宿泊が 109 名 (4.2%)、大阪府内の宿泊施設に宿泊が 50 名 (1.9%) と全体の約 3 割が宿泊を伴って参加していたことも明らかとなった (図 15)。

5. 奈良マラソンの大会運営について

給水・給食所で良かった提供物について聞いたところ (複数回答可) は、スポーツドリンク、バナナ、ぜんざいなどの水分や糖분을補給できるものが多くのランナーに好まれる結果となった (図 16)。

また、マラソン大会の満足度に関して「該当せず/利用していない・不満足・やや不満足・どちらでもない・やや満足・満足」の 6 段階で聞いたところ、沿道からの応援、完走タオル、運営スタッフ・ボランティアの対応、完走証が高い満足の値を示した (図 17)。今回の調査では、奈良マラソンコースの走りやすさについて、各ランナーが感じた各ポイントの混雑状況を「1. 混雑していなかった～4. 衝突等の危険を感じるほど、とても混雑していた」の 4 段階で聞いたところ、人が集中するスタート付近は多くのランナーが混雑を感じたようであったが、レースが進むごとに混雑状況も解消されていったことがわかる (図 18)。

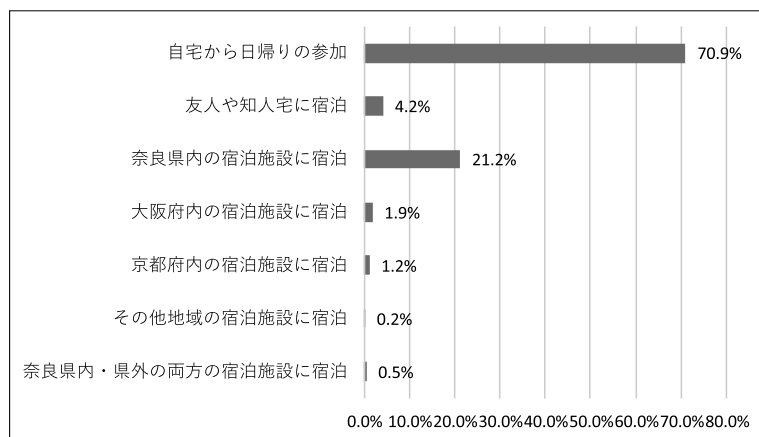


図 15 奈良マラソン 2019 に参加するにあたっての宿泊

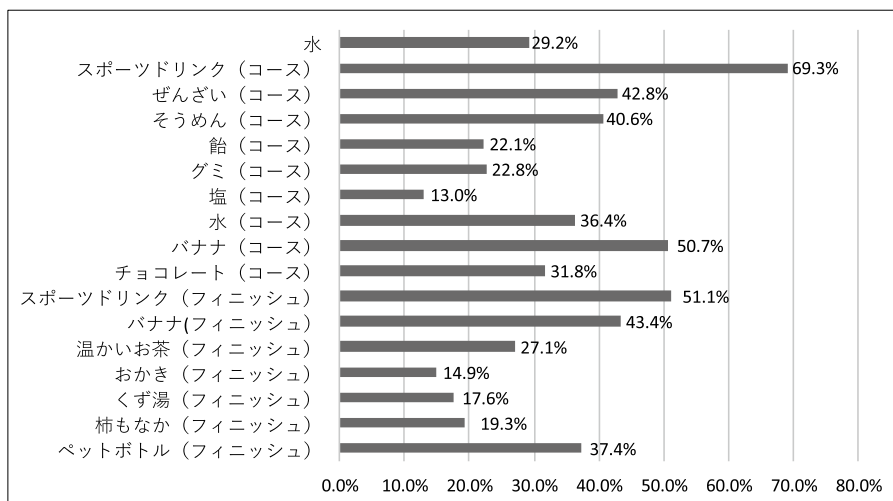


図 16 奈良マラソン 2019 の給水・給食所で良かった提供物



図 17 マラソン大会の満足度

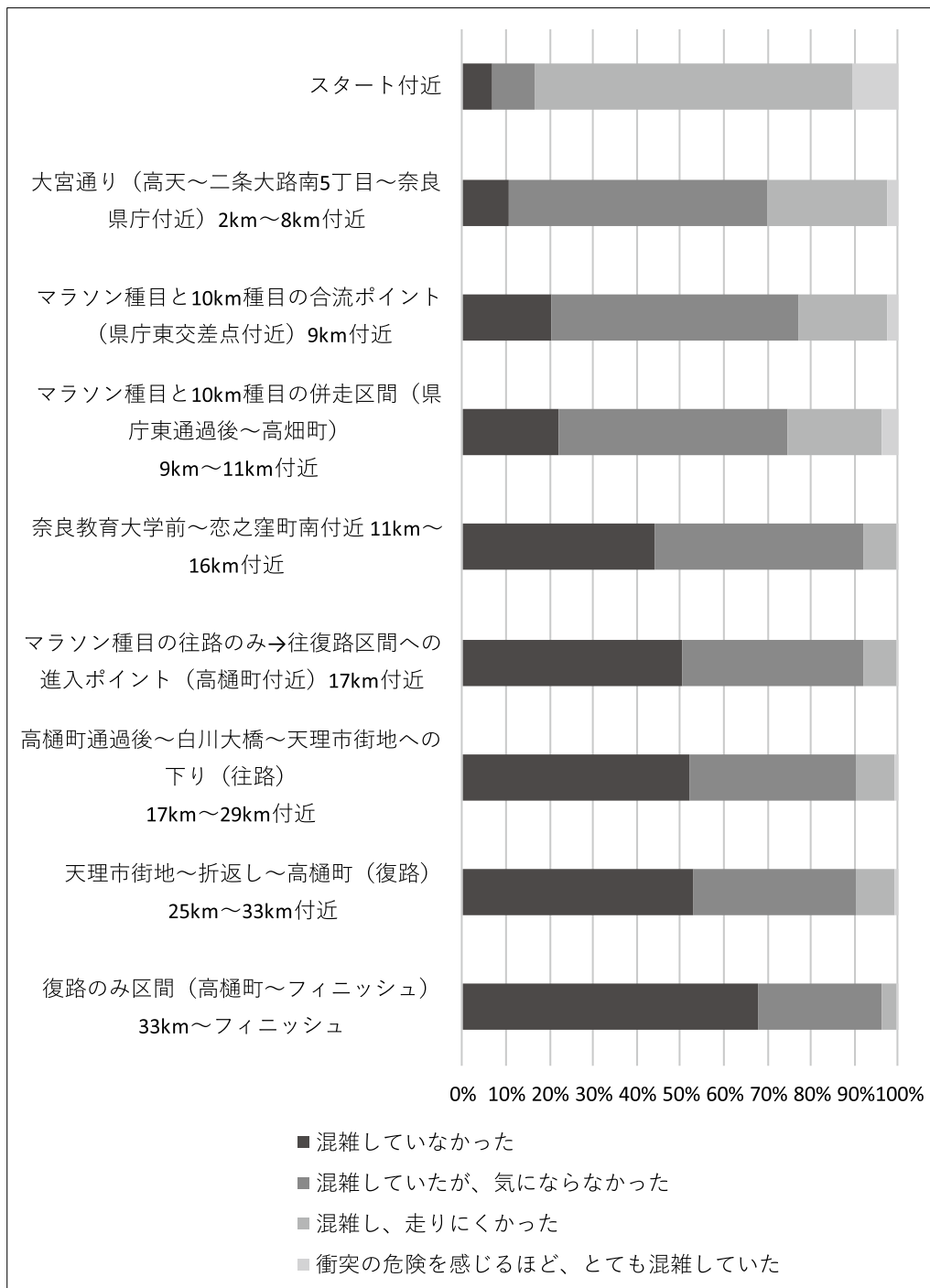


図 18 奈良マラソンのコース混雑状況

6. 奈良マラソンの評価と再参加意図

奈良マラソンに対する総合的な評価に関しては、多くのランナーが、大会に参加する前の期待よりも良いと回答し、総合的な評価についても満足していることがわかる。そして、再参加意図についても、今後も奈良マラソンに参加したいや、奈良マラソンを友人・知人に勧めたいと回答していた（図 19～21）。

7. 奈良マラソンへの参加を検討するにあたり感じた制約と日頃の取り組み

奈良マラソン 2019 への参加を検討するにあたり感じた制約については、全体では「私はランニング活動以外に多くの責務がある」と「私は多くの家族に対する責務がある」の2項目のみが平均値 3.0 を上回った。このことから、ランナーは、マラソン大会への参加を検討するにあたっては、多くの制約の中でも特に家族に対してや仕事・勉強などランニング活動以外の責務を感じていることがわかる（図 22）。これまでに行われた調査の結果では、ランニング継続年数が長いランナーほど、市民マラソン大会への参加における制約は少ないと報告されている（備前ほか, 2015）。今回の調査では、図 8 に示すように、どの年代でも男性の方が女性よりもランニング歴の平均値が高くなっていった。このことから、男性よりも女性の方が多くの項目を制約と感じているという結果に繋がっていると推察される。

一方で、奈良マラソン 2019 に参加するにあたり日頃から行っている取り組みに関しては、「私はマラソン大会に参加するために日程の調整をしている」や「私は生活費の範囲内でマラソン大会に参加している」、「私はマラソン大会に参加するために必要な能力の向上に努めている」などの項目が高い値を示した。この結果から、多くのランナーがマラソン大会への参加に向けて、時間のマネジメントや金銭的マネジメント、スキルの獲得といった取り組みを行っていることがわかる。奈良マラソン 2019 に参加するにあたり日頃から行っている取り組みについても t 検定を用いて男女間の比較を

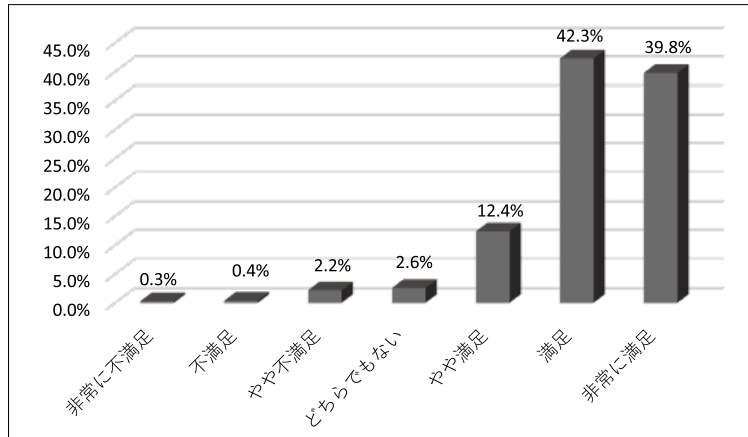


図 19 奈良マラソン 2019 の総合的な評価

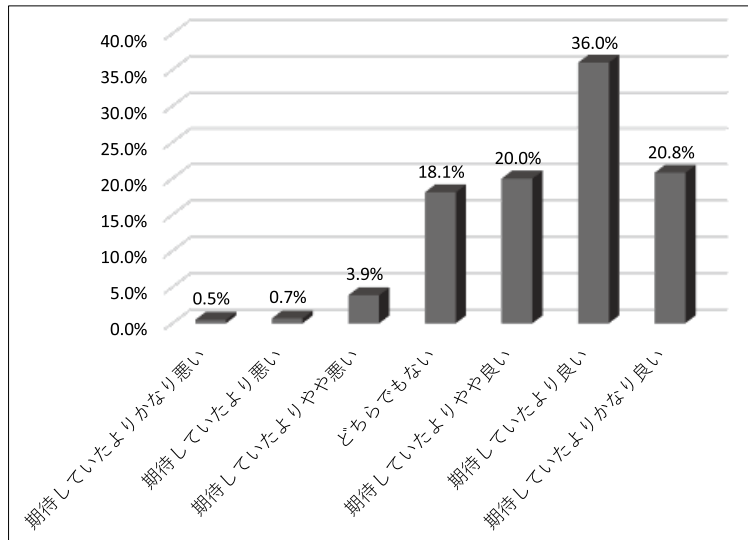


図 20 奈良マラソン 2019 の参加前期待と評価

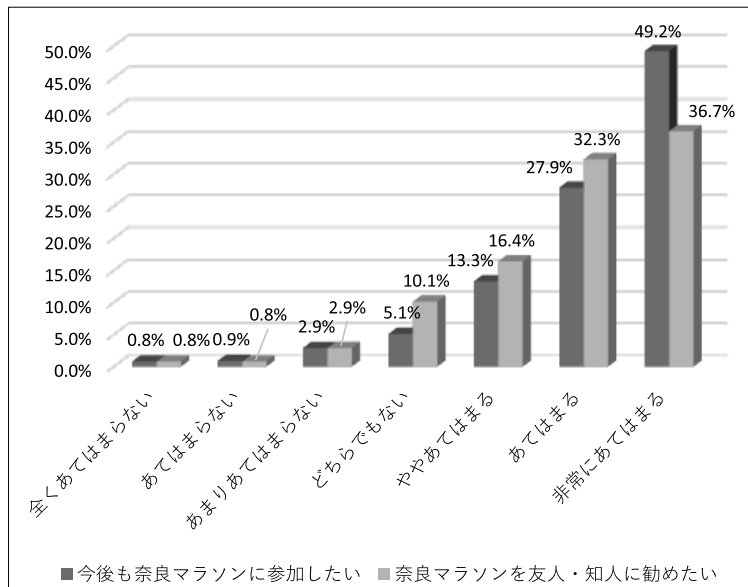
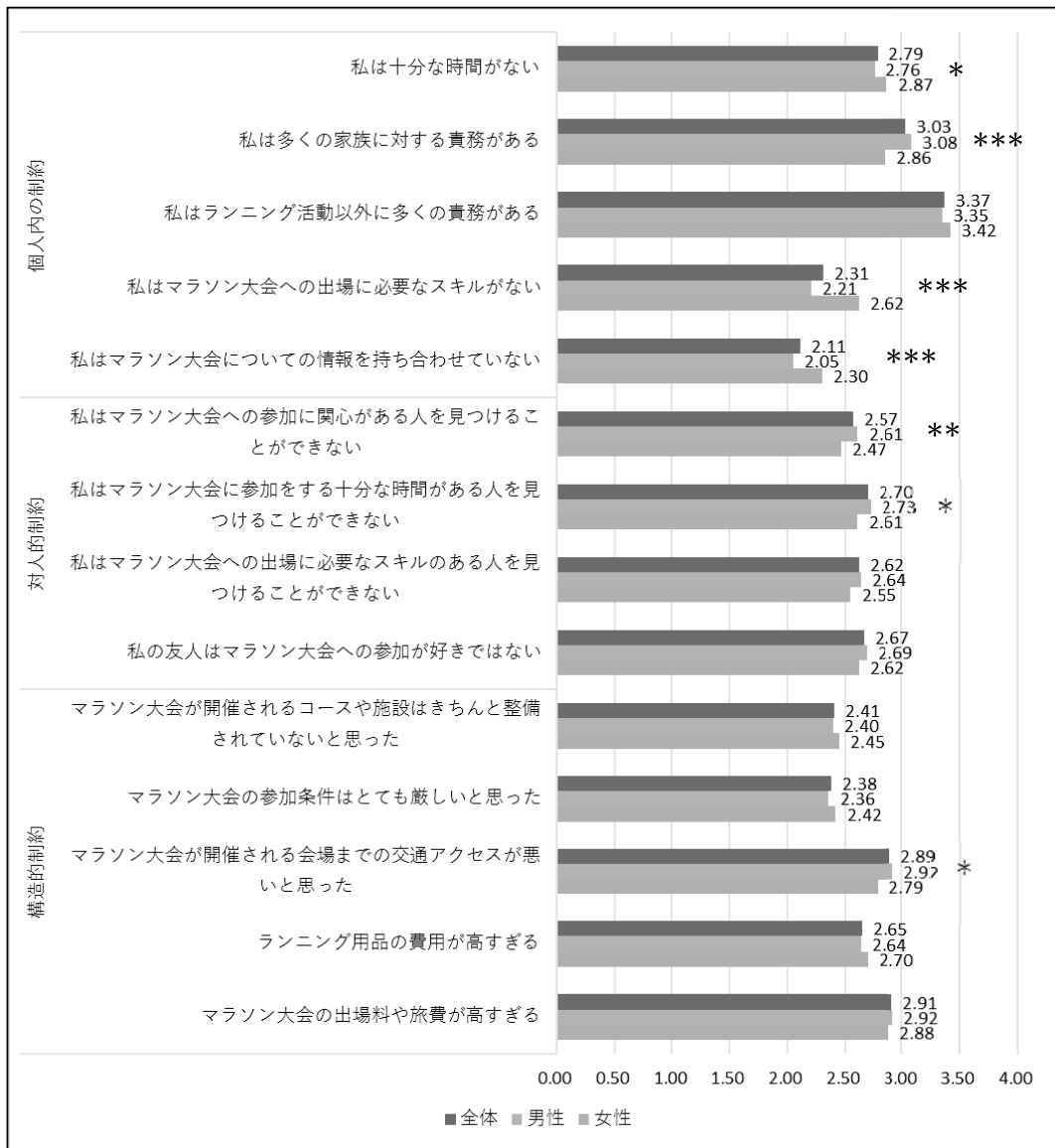


図 21 奈良マラソンの再参加意図

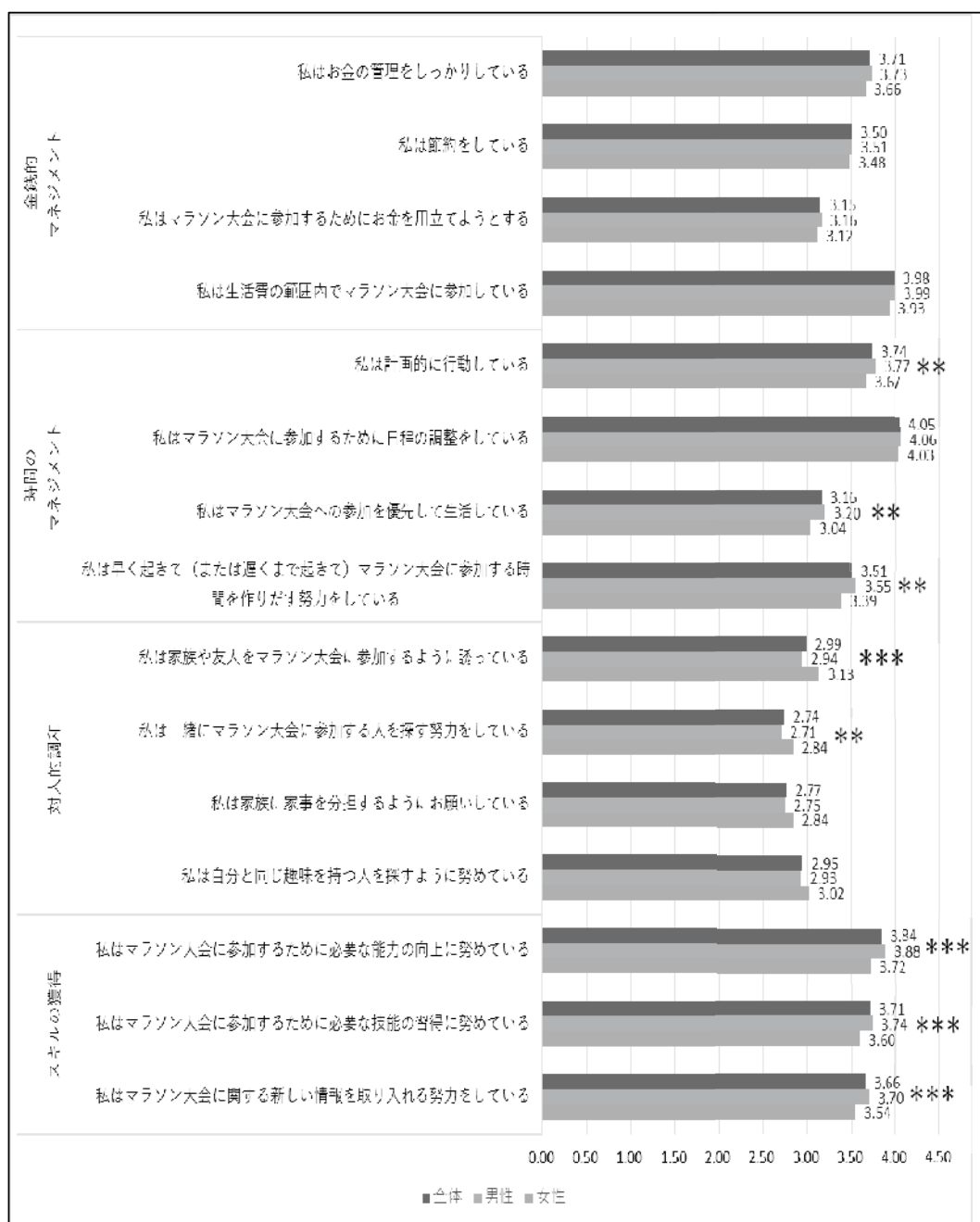


*p<.05 ** p<.01 ***p<.001 は 男女間で統計的に有意な差が見られた項目を示す

図 22 マラソン大会への参加を検討するにあたっての制約（男女の比較）

行ったところ、「私は計画的に行動している」や「私はマラソン大会に参加するために必要な能力の向上に努めている」などの9項目で統計的に有意な差が見られた(図 23)。その中でも、男性は女性よりも計画的に行動しているや、マラソン大会への参加を優先した生活をしているといった時間のマネジメントを、女性は男性よりも家族や友人をマラソン大会に参加するように誘うや、一緒にマラソン大会に参加する人を探す努力をしているといった対人的調和に取り組んでいることが明らかとなった。その結果、女性は男性よりも活動と一緒に参加する人との関係に由来する対人的制約をあまり感じていないという結果に繋がっていると考えられる。

また、奈良マラソン 2019 に参加するにあたり宿泊を伴って参加したランナーと日帰りで参加したランナー間でも t 検定による平均値の比較を行ったところ、「私はお金の管理をしっかりとしている」や「私はマラソン大会に参加するために日程の調整をしている」などの12項目で有意な差が見られた。特に、マラソン大会に宿泊を伴って参加するランナーは日帰りで参加したランナーよりも、日頃から節約やお金の管理といった金銭的マネジメント、日程の調整などの時間のマネジメント、そして必要な能力の向上やマラソン大会に関する新しい情報を取り入れるなどのスキルの獲得を行っていることがわかる(図 24)。今回と同じ奈良マラソンに参加したランナーを対象に実施した

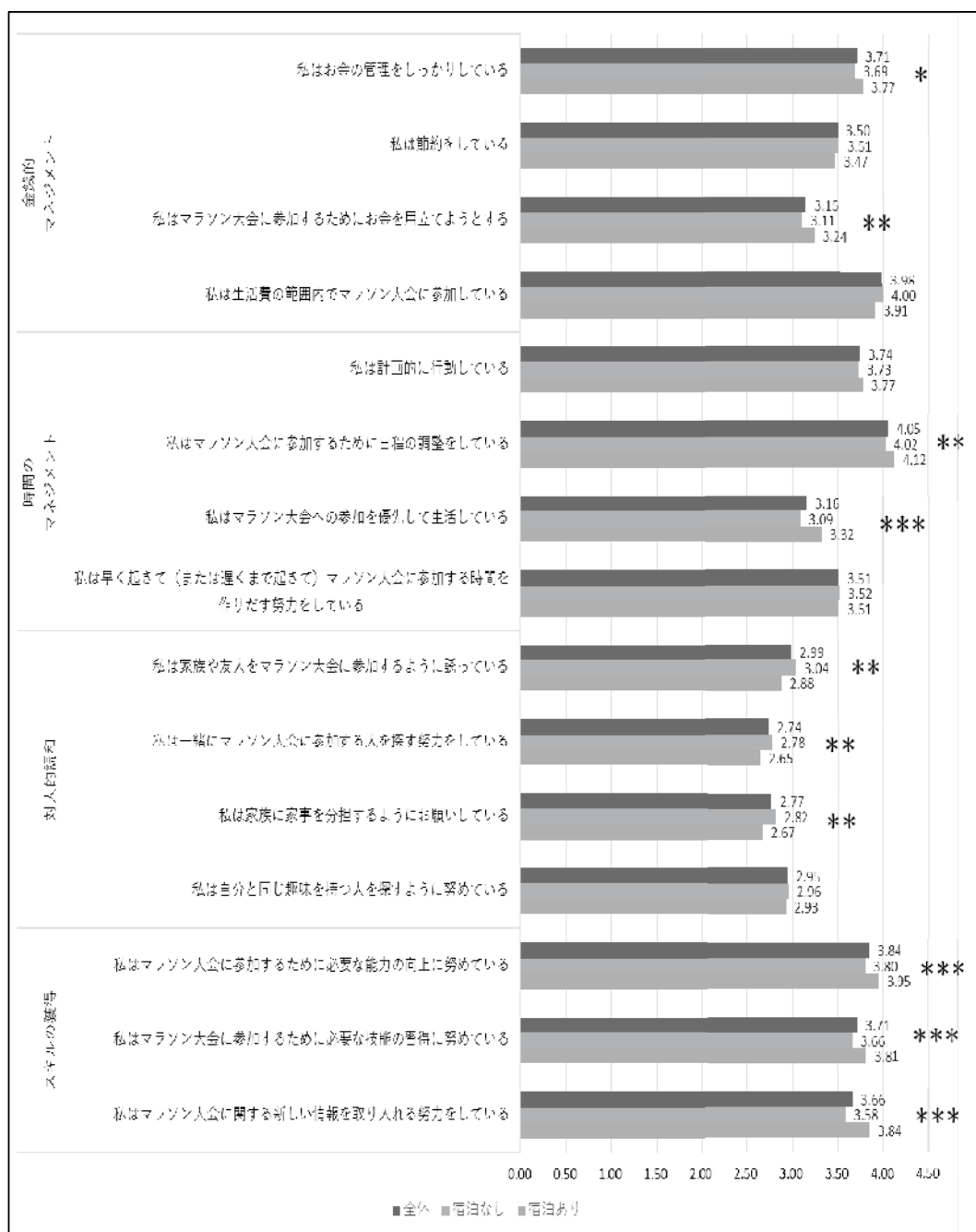


*p<.05 ** p<.01 ***p<.001 は 男女間で統計的に有意な差が見られた項目を示す

図 23 ランナーが日頃から行っている取り組み（男女の比較）

調査では、宿泊を伴って参加したランナーの方が日帰りで参加したランナーよりも仕事・勉強の責任をより制約と感じ、反対に休暇の取得については、日帰りで参加しているランナーの方が制約と感じている結果が見出され、その要因として宿泊を伴ってマラソン大会に参加する熱心なランナーは大会への参加に向けて年間でスケジュール調整を行っている」と推察されていた

(備前ほか,2015)。今回の調査で得られた宿泊を伴って参加したランナーは、日帰りで参加したランナーよりも「マラソン大会に参加するために日程の調整をしている」や、「マラソン大会への参加を優先して生活している」という結果は、その推察を裏付ける根拠のひとつとなるだろう。



*p<.05 ** p<.01 ***p<.001 は 宿泊なし・あり間で統計的に有意な差が見られた項目を示す

図 24 ランナーが日頃から行っている取り組み（宿泊なし・ありの比較）

IV. 結論

本研究では、奈良マラソン 2019 ランナーを対象にアンケート調査を実施し、その結果から個人属性やランニング実施状況、大会参加状況、大会に対する評価、宿泊の有無などを明らかにするとともに、ランナーが大会への参加を検討するにあたり感じた制約やその制約を解消するための行動を明らかにすることを目的とした。その結果、奈良マラソンに参加するランナーたちは日頃から金銭的マネジメントや時間のマネジメントなど様々な取り組みを行うことによって大会の参加に繋がっていることが明らかとなった。今回の調査結果では、約 30% のランナーが宿泊を伴って参加し、その多くが近畿地方以外からの参加者であった。すなわち、マラソン大会への参加を目的としたスポーツツーリストであると考えられる。マラソン大会に宿泊を伴って参加するランナーは日帰りで参加するランナーよりも、大会に参加するにあたり宿泊費や交通費などの費用面や移動の時間がかかることから、日頃からマラソン大会への参加を意識した生活を送っているのだろう。

また、「私はランニング活動以外に多くの責務がある」や「私は多くの家族に対する責務がある」といった仕事や勉強、家庭における責任は多くのランナーがマラソン大会への参加およびランニング活動を継続するにあたり直面する課題であると言える。仕事や勉強、家庭での責務を果たすことはランナー個人個人の努力による部分が大きいですが、マラソン大会の主催者は大会に関する情報をなるべく早くランナーに提供することで、ランナーは計画を立てやすくマラソン大会に参加しやすくなるのではないと思われる。近年人気の市民マラソン大会では、多くの場合、定員に対する参加希望者が上回った際は抽選によって出場者が決定される。抽選に漏れることにより、参加の意思はあるものの出場が叶わないといったことや、抽選に申し込んでから当選が確定するまでの期間は待機しなければならない。これは観戦型スポーツでいえば、人気のイベントはチケットの入手が困難であるのと同様であり、参加型スポーツイベントであるマラソン大会では「大会の申し込み方法」は大きな課題であると言える（備前ほか、2016）。奈良マラソンでは、現在多くの参加枠がインターネット申し込みによる先着順で決定される。この方法においては、参加の可否が申し込みと同時に決定することからランナーにとっても大会までの計画を立てやすくなっていることから、今後もこのような工夫は継続すべきであると思われる。

また、マラソン大会への参加を検討するにあたって生じる個人内の制約の男女間比較で、「私は家族に対

する責務がある」のみ男性の方が高い値を示した。この結果は大変興味深く、今後日常生活の中でそれぞれのランナーがマラソン大会への参加をどのように捉えているかを知る手掛かりになると思われる。今回の調査では、図 1 に示した参加動機から始まり制約とその解消行動を経て実際の参加に至るまでの因果関係までは明らかに出来ていないので、今後の研究においてはランナーの参加行動をモデル化し検証することで、マラソン大会に参加するためのランナーの行動を解明することに繋がるとと思われる。

【謝辞】

本研究の調査においては、奈良マラソン実行委員会のご協力により、貴重なデータを収集することができました。また、奈良マラソン 2019 に参加した多くのランナーの方々が学術調査の趣旨をご理解いただき、ご回答くださいました。ここに感謝の意を表します。

文献

- 備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人（2015）都市型市民マラソン大会への参加における制約とランニング活動動向の関係：個人内の制約と対人的制約からの検討。生涯スポーツ学研究, 12 (2): 15-23.
- 備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人（2016）市民マラソンランナーが都市型市民マラソン大会への参加を検討するにあたり生じる構造的制約。生涯スポーツ学研究, 13 (2): 1-14.
- Crawford, D. W., & Godbey, G. (1987) Reconceptualizing barriers to family leisure. *Leisure Sciences*, 9: 119-127.
- 一般財団法人アールビーズスポーツ財団（2018）ランナー世論調査 2018. <https://runnet.jp/project/enquete/2018/>（参照日：2020年2月6日）.
- Jun, J., & Kyle, G. T. (2011). The effect of identity conflict/facilitation on the experience of constraints to leisure and constraints negotiation. *Journal of Leisure Research*, 43(2), 176-204.
- 毎日新聞（2019）奈良マラソン 1万6,000人、古都駆ける。2019年12月10日 地方版/奈良。
- 奈良マラソン実行委員会（2019）奈良マラソン 2019 ホームページ：コース紹介。 <http://www.nara-marathon.jp/course.html>（参照日：2020年2月6日）.
- 二宮浩彰・松永敬子・長積仁（2014）都市型市民マラソンの参加者がもたらす経済波及効果の推計。生涯スポーツ学研究, 10(1-2): 31-40.
- 読売新聞（2019）市民マラソン 過当競争。2019年12月16日 夕刊。
- 徐嘉楓・胡威・備前嘉文・二宮浩彰（2019）都市型市民マラソンにおけるスポーツ消費者行動：奈良マラソン 2018 参加者のクチコミ行動の分析。同志社スポーツ健康科学, 11:7-15.